

研究だより 第2号



未来の京都創造研究事業は、「大学のまち京都」の『知』の集積を活用し、未来の京都づくりに向けた政策を創造するため、大学の研究者と京都市の担当部署との協力により調査・研究を行っていただく事業です。

今回は、今年度の5件の調査・研究テーマのうち2つを紹介いたします。

自由課題1

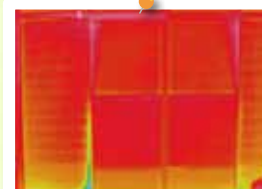
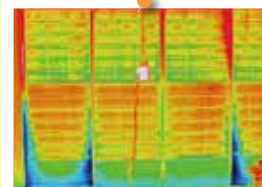
京町家における居住文化に対応した断熱改修手法に関する研究

研究の概要

京町家の居住文化を継承しつつ省エネルギー性能を改善する断熱改修手法を提案することを目的とした研究。天井裏及び床下に断熱材を設置し、断熱建具(断熱ふすま、太鼓張障子)を導入する「入れ子型部分断熱改修」を実施した京町家における調査を通じて、その効果と課題を検証するとともに、具体的な断熱改修手法を提案する。



断熱改修を実施した居室



研究メンバー

- 土井 脩史
(京都大学大学院工学研究科建築学専攻・研究員)
- 李明香
(立命館グローバルイノベーション研究機構・研究員)

既存建具(上)と断熱建具(下)の熱画像。赤い部分は温度が高い。

京町家居住者への住み方調査

生活記録調査やインタビュー調査を通じて、断熱建具の開閉と空調の使用の関係、生活行為と居場所の関係を分析している。居住者が建具の工夫によって柔軟な住み方をしている実態が確認され、今回の断熱改修が季節に応じた住み方の継承に意味があったことが見えてきつつある。

京町家の温熱環境調査

京町家における空調による室温変化や換気量を測定することで、断熱性能・気密性能の定量化を試みている。さらに、部分断熱改修によるヒートショックの原因を明らかにするために、暖房室から非暖房室に移動する場合の室温変化や居住者の血圧変化等を測定する被験者実験を行っている。

そして・・・

これらの調査の結果を分析し、京町家の居住文化に対応した断熱改修手法を提案するとともに、京都市の政策である環境配慮住宅「平成の京町家」といった、今後の京都市における住宅の省エネルギー政策、京町家の活用政策の発展に役立てることを目指している。



研究会の様子。調査・研究の進捗状況を共有しています。研究者や学生、市の担当部署も参加しています。

研究代表者 土井脩史さんからひとこと



京町家では内部と外部の繋がりに支えられた豊かな居住文化が形成されてきたため、内部と外部の繋がりが失われる危険性のある住宅全体の高气密・高断熱化が適当な断熱改修手法とは限りません。本研究では、そのような問題意識のもと、京都大学高田研究室、立命館大学近本研究室を中心に、京都市住宅政策課や京町家居住者にも参加いただいで、京町家の豊かな居住文化を継承・発展させる断熱改修手法を検討しています。

指定課題1

障がい者雇用を実現する 持続可能な「食の経営」 についての研究

研究の概要

障がい者の自立を目指すため、「社会貢献活動」としてではなく、経営プロセスの中に障がい者雇用を組み込むには、誰がどのように取り組めばいいのかが、被雇用者と雇用者双方の視点から考える。そのうえで、京都における障がい者雇用モデルの普及に向けた実践的な提案を行う。

文献サーベイ・事例調査

企業と障がい者のかかわりを整理するに当たり、文献サーベイに加えて事例調査を行った。雇用側の視点については障がい者雇用企業やNPOなどに対して、被雇用側の視点については福祉作業所などにおいてインタビュー調査を実施。共通するノウハウが多いとされる高齢者雇用事例も調査した。

アクションリサーチ

KYOCA (旧京果会館) で障がい者とともにチョコレート製品の製造を行う京都ショコラボに対し参与観察などを行い、現場における経営者と障がい者のかかわりを調査した。その結果、障がい者の就労支援に携わった経験が、人気レストランの人材育成術を進化させている、という姿が見えてきた。



アクションリサーチの舞台となる京都ショコラボ

研究メンバー

- 古村 公久 (京都産業大学経営学部・准教授)
- 大室 悦賀 (京都産業大学経営学部・教授)

近年、いわゆる「障害者雇用促進法」改正やそれに基づく「障害者差別禁止指針」「合理的配慮指針」制定など、就労現場における障がい者とのかかわりが注目されています。



研究代表者の古村先生

「障がい者雇用」は、雇用者と被雇用者、福祉と事業、など複合的視点が必要になるだけでなく、障がい者を一律的に捉えることができない複雑な分野ですが、障がい者の就労の場が広がるきっかけとなるような研究成果を出すことを目指しています。



チョコレート製造の様子。道具にも工夫が凝らされています。

そして・・・

これらの調査結果から得られた知見に基づき、KYOCAで2月下旬から3月上旬にかけて講座を実施し「障がい者の能力を引き出す仕組み」などのノウハウを京都市内の事業者へ提供するだけでなく、障がい者とともに成長する持続可能な経営のあり方を提案する。これにより京都市内において「食の分野」における障がい者雇用を普及させることを目指す。

編集後記

京町家は、徒然草が言う「家のつくりようは夏を旨とすべし」との考えで作られているため、冬は大変寒いです。伝統を守りながらも現在に心地良く生活できる町家のありかたを模索中。もう一つは、障がい者雇用と食の経営の両立という意欲的な取組み。障がいがあっても仕事を通じて社会に参加し、おいしくて安心な食べ物を作る。消費者はその商品を買うことで持続的経営と障がい者雇用が実現します。2テーマともご注目を！

公益財団法人
大学コンソーシアム京都
シンクタンク事業担当 水田、矢野



E-mail mirainokyoto@consortium.or.jp
電話 075-708-5803
URL <http://www.consortium.or.jp/project/seisaku/think-tank>